

岡野玲子十芝祐靖

安倍晴明と楽との
関わりを探ること

——『陰陽師』では雅楽がとても重要な位置を占めていますが、岡野さんご自身も笛をなさるんですよね。なぜ笛を？

岡野 持ち運びが楽だから（笑）。いや、じつは「越天楽」以外で最初に聴いた雅楽の曲が芝先生のCDだったんですよ。芝へえ、そうですか。

岡野 『陰陽師』の仕事が決まったときに、まず何か雅楽を聴こうと思って借りたCDが、「安摩乱声」の入っている『天竺からの音楽』というアルバムで。西域の曲なんです。その「安摩乱声」という曲に、もう何度も言ってますけど、本当にびっくりしちゃって、椅子から立ち上がっちゃうくらい。この曲は何？ というくらい、異常なんです（笑）。今まで聴いたことのないような、なんていうか、ざわざわと来るものがあるんですね。

芝 そうですね。

岡野 これはどうしてこういうことになるのか、知りたいと思ひまして。知るためには自分で笛を持つなり吹いてみるなりしないと、理由がわからないだろうと思って、



それで習いだしたんです。そのきつかけになった「安摩乱声」を、やっと今回「安摩」という話で描いたんですよ。今描いているのは、その舞です。

芝 古い話になりますが、奈良の大仏開眼供養（七五二年）のときにベトナム（林邑）の仏哲というお坊さんとインドの波羅門の菩提徳那というお坊さんを招いたんです。ヒマラヤがあつて直接には来れないから、西域のほうをまわって長安に来て、それから日本へ渡ったのだと思います。そのときに自分たちの、あるいは途中の芸能も持ってきたのが「林邑八楽」といまして、「安摩」はそのうちの一曲です。「八楽」というから八つ曲があるのですが、「迦陵頻」^{（かろうりん）}「拔頭」^{（はつとう）}など、みんな現在でもきらつと演奏できるんですよ。

岡野 それも特殊な曲ばかりですよ。舞も素晴らしいですよ。優れた音楽というのは、続くんですよ。

古代中国の音律は 数学で決まった

万七・一四七になって、それを「すべてが実つたとき」という意味である酉の一万九六八三で割ると、九という数になる。これは「天」の数なんです。それを三等分してひとつとつた、六という数が「地」の数。そして、六を三等分して二を足した八という数が「人」の数なんだそうです。そこまではなんとなく納得できたのですが、割り切れるから（笑）。

芝 黄帝というのが古代中国の五帝の一人ですが、その部下に伶倫という人物がいるんです。この人が中国音楽の祖です。五声十二律はこの人から始まっていると言われている。「人首蛇身」といいますから、どう考えても人間じゃないけど。

岡野 竹をとってきて、最初に笙を作つて音律を決めたというふうに聞きましたが、芝 黄帝が伶倫に命じて、崑崙山の麓に行つて竹を切らせた。竹を切らせて十二の筒を作つた。鳳凰の鳴く声に合わせて、雄の鳴きを六本、雌の鳴きを六本、それで十二律を作つたというふうに言われているようですね。

岡野 美しいですね。

岡野 雅楽のなかの特に音律、それと天文学、暦はほとんど一緒に発生しているんですね。

芝 これはね、話す大変なことになってしまふんですが、中国の三皇五帝にまで話がさかのぼつていっちゃうんですよ。それから易学、占いのほうへ行つて、それが発展していつて、陰陽五行説になって日本に入つてきているらしいんで、大変なことやなあ（笑）。

岡野 今読んでいる本によると、易の筮竹を二七一本合わせると、正六角形になるんですよ。そこから音律を計算してというふうなことが書いてあつて……。

芝 へえ、本当かなあ。

岡野 そつちも調べてからじゃないと、とても先が書けないなあと思つて。

芝 まあ、当たるとも八卦、当たらずとも八卦で（笑）。

岡野 とにかくみんな数学なんですよ。

芝 そう、すべて数学です。

岡野 そして音律と一緒に暦がある。

芝 当然ですね。古い中国には三という数字を駆使して音律を求める計算があります。

九寸の竹を使うのですが、弦でやる場合もある。九寸の竹で得られる音である黄鐘（古代中国音名。西洋のC）を三等分してひとつ（二）をとると六寸になる。つまり

五度上の音（G）ができる。六寸をまた三等分して、今度はひとつ（二）足すと八寸になる。つまり四度下がる（D）。こうした計算を繰り返して一オクターヴの十二音を求めていくのです。漢の時代からそういう計算がすごく発達するのです。ところがこの計算でいくと、本来一対二であるはずのオクターヴに微妙な差が生じる。だから何度も繰り返していくと、半音のあいだにものすごくたくさん音の音を得られるわけです。陰暦に合わせて三六〇個の音を計算して、すべてに名前をつけていった暇人もいらしい。

岡野 音がどんどん螺旋を描くわけですね。これを「循環無端」と呼んでいます。

岡野 最初の九寸というのを決めた理由があつて、黄鐘を一としたときに、黄鐘から十二支に合わせて三倍していくんだそうです。黄鐘を子として、丑で三、寅で九というふうに三倍していくと、最後の亥で一七

芝 このように中国では神代から十二律があつたと言われているんですが、それはオパーとしても、非常に古くから音律が計算されていて、その音律とともに易学とかいうものがすごく発展していつたのだと思います。そのあたりは岡野さんのほうがずっとよく知っておられると思うんですが（笑）。

岡野 とんでもない。

孔子の礼楽思想

芝 ここまでは音名、つまり絶対音の話ですが、中国にはその他に階名、つまりドレミファがあるんです。「宮」「商」「角」「徵」「羽」の五声（※は武田信玄の兵法にも用いられたという話を聞いたことがありますが、もちろんそれより前にも、岡野さんご専門の安倍晴明などがいて、大いに利用されていたわけですが、とにかく音律はあらゆることに使われるわけです。四季であるとか、色であるとか。

岡野 五声にもそれぞれ意味があるそうですね。

芝 私、私字引を引いてみたんですが、どれ

も建物を建てているような意味なんです。「宮」は柱、背骨。「商」は台地、計る、生み出す。「角」は平らにする、角材。「徵」は地面からまっすぐ立てる、現れる。「羽」は板を並べる、飾る。御殿でも建ててるのかなあ、と思わせますね。

岡野 なんだかフリーメイソンみたいですね（笑）。雅楽にはこういう、喩えというか、何かの象徴が多いと思うんですが。

芝 そうですね。宗教的というか、中国の思想的なもの。儒教、孔子の教えですね。とくに五常だとか五行だとか（※参照）。

五臓とか五官とか五行だとか（※参照）にみえませんが、すべてが孔子の「礼楽」にあるのかもしれない。孔子の礼楽思想では五常が大事にされ、とりわけ仁、慈しむということを大切にされたわけです。それぞれの王朝に音楽がありました。その音楽を非常に重要視して、自分たちの教養や教育のために使うわけです。それがもともと雅楽なんですよ。礼と楽、それを合わせて礼楽思想と言つておられます。音楽と礼儀作法を合わせて、人格を作っていく。

岡野 当時の雅楽というのは、今の「みや

「び」とは違って、「正しい」という意味だったんですよ。同じ字だけれども。」

芝 そうとっていただいいていいですね。

岡野 ただ、今日で雅楽と呼ばれている音楽というのは、孔子が作った音楽とは違うんでしょう？

芝 そうです。今われわれが演奏しているのはもともと唐の時代の宴会音楽ですね。

もう一つは胡琴というのがあるって、これは西域のほうの音楽ですね。うっかりするとインド、あるいはベトナムのほうの、ちょっと泥臭い音楽。それと宮廷の芸術音楽である俗楽が一緒になった。唐の時代に日本に伝えられました。日本には結構早くから儒教が入ってきているんですね。仏教よりもずっと前に。けれどもおっしゃる通り、儒教の音楽である雅楽というのは入ってきていないのです。だから儒教の宗教音楽、孔子廟の音楽というのは、日本では聴くことができない。

岡野 禁止されていたんですかね、入ってこなかったのは。遣隋船や遣唐船が行ったわけですから、一曲くらい入っているもおかしいんですけど。

下の土のときは四人と急に数が減る。というところは、われわれがやっているのはほとんど四人舞ですから、一番下のやつをやっているんで(笑)。

医者と陰陽師は

楽を習わなくてはいいけない？

岡野 安倍晴明自身、そういう楽とか舞について調べていたと思うんです。

芝 当然そうでしょうね。あの頃の上流階級というか、まあ彼は役人、それも下つ端の役人ですが、でも、それくらいになると御殿に上がったりしますよね。そういうところで、楽を習ったり舞を習ったりということはあると思いますね。

岡野 自分がやらなくても、知っていたとは思いますが、『体源抄』とか見ると、医者と陰陽師は楽を習わなくてはいいけないと。

芝 なるほど、そうかも知れませんがね。

岡野 人の身体から波動という音がでてくるんですが、能力のある医者はそれを聴いて、内臓のどこが悪いかがわかる。それがもともとレベルが上の医者です。真ん中

芝 そうかも知れませんが。孔子廟の音楽というのは演奏する楽器も違うし、私たちがやっているような音楽、いわゆる芸能としての音楽とはまったくかけ離れたものなんですね。

岡野 じゃあメロディーがないとか。

芝 ほっとんどない。

岡野 なるほど。

芝 それがまた孔子の思うところなのだと思いますね。国を興すには、さきほどの礼楽思想でもって、いい音楽をやらなくてはならない。心を穏やかにしなければならぬ。三歳で音楽と舞をやる、五歳で弓と馬をやって、十歳で礼儀作法を勉強するといふのがあるんだそうです。自己を抑制し人のためにつくすとか、親に対する孝行とか、そういうものを考えていくうえで精神を落ち着かせていかなければいいけない。だから音楽に動きがないんです。楽器は猛烈にあるんです。舞人もまたたくさんいたりしてね。ぐわーん、とやってしばらくわんわん鳴っているだけ。とにかくゆっくり、またしばらくすると合図があってジャンと。こんな感じなんです。飛んだり跳ねたり

の人はそれが聴けなくて、どうしたかっていうと、琵琶を弾いてソナード代わり使って音を出し、かえってきた音を聴いてどこが悪いかが調べたらしいんですよ。それで医者の丹波家は琵琶を持つことが許されていたそうなんです。

芝 へえ。

岡野 一体どういう風に聴いていたのか、知りたいと思つて。

芝 音を五臓にも配していますよね。ドの音が出ると肝臓が悪いとか？(笑)。

岡野 アメリカでオステオパシーという整体を勉強してきた人がいて、音楽をずっとやってきた人なんです。ステージの音響の仕事に一時ついたら、いろんなものから音が出ているのがわかるようになってオステオパシーの医者になっちゃったんです。実は今私はその人のところに通つていて(笑)……。彼には患者がどういう風に見えて聴こえるのか知りたくて。

芝 ぼんぼんと叩いたり、あれがそうですよね。われわれは西瓜とかくらしいですが(笑)。

岡野 陰陽師が雅楽寮の頭を務めていた

という感じじゃない。私はそれを一度見たことがあります。雅楽の大会があつてソウルへ行つたときに、今日孔子廟で演奏があるというので見に行つたわけです。踊っていたのは高校生くらいの女性が八×八、六十四人。

岡野 はいはい。

芝 「八角の舞」というのですが、本来はそれを囲むように四面に楽人を配するのですが、この時は楽人は一面だった。舞人の女子高生くらいのお嬢さんたちが、ゆっくりゆっくりと舞っている。ジャンという音楽に合わせて。

岡野 それ、見てみたいです。というのは、実は安倍晴明が一度復元しているんですよ。大嘗祭で。吉志舞というので、やはり六十四人に舞を舞わせたらいいです。

芝 なるほど雰囲気が出てくるねえと思いましたが。われわれがやっている雅楽とはまったく違いますけれどね。日本の雅楽は着飾って舞いますけれども、舞人は多くても四人とか六人です。六十四人にとってはかなわぬ。向こうでは、天子の祭祀では六十四人の舞、次は諸侯で三十六人、一番

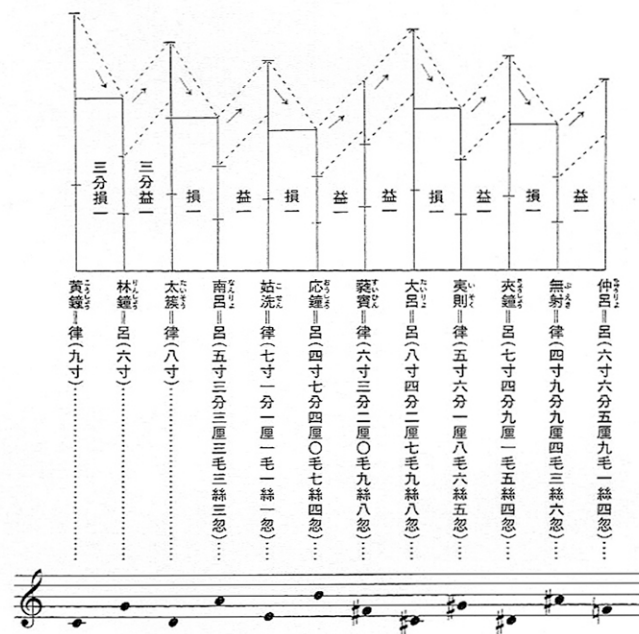
こともあるんです。晴明の百年後くらいの人で安倍泰親という、晴明以降ではもっとも魔術的と言われている、日記に残っている人がいるのですが、たぶんその人がやっていたのではないかと思います。だから、先ほどの中国の音律の思想とか、反閏(へんごん)などを見ると、音楽や舞と陰陽道つてすごく近かつたという。当時の官人にとつては知っていたのが常識だったんでしょうね。

芝 そうでしょうね。楽もいわゆる大きな陰陽道のなかの一部というふうな考えられていたんでしょう。そういう人たちは当然すべてを知っていないと。でも最近では易だとか陰陽五行説とかをやっているのは特殊な方だけで、今の雅楽人の九九%は知らないですね。かえって岡野玲子ファンの方がよく知っているかもしれない(笑)。

岡野 源博雅は村上天皇の時代の人ですけども、それ以前の仁明天皇の時代に、すごく才能のある楽師がいっぱい出ましたね。



①三分損益法算定（立均）図



②音律事象対照図

中国	日本	西洋	四季	四宮	方角	色彩	五音	五常	五行	五臓	五官
古律	音名	音名	四季	四宮	方角	色彩	五音	五常	五行	五臓	五官
太簇	ㄅ	D	全季		中央	黄	宮	信	土	脾	身
姑洗	ㄆ	E	秋	白虎	西	白	商	義	金	肺	鼻
林鍾	ㄆ	G	春	蒼龍	東	青	角	仁	木	肝	眼
南呂	ㄆ	A	夏	朱雀	南	赤	徵	智	火	心	舌
應鍾	ㄆ	H	冬	玄武	北	黒	角	礼	水	腎	耳

八三〇年か四〇〇年頃からかな。それまでたくさんあった楽器も、その時期に取捨選択された。

岡野 藤原貞敏がいた頃ですね。

芝 貞敏というのは大変な琵琶の名手だったんですね。遣唐船に乗り中国へ勉強しに行き、向こうの琵琶博士に習うわけですね。それでその寝姿に青山と玄象という二面の琵琶をもらって帰ってきて、仁明天皇に献上するわけです。その琵琶が、後でいろいろエピソードがあつて、安倍晴明が活躍したりするわけですね。

岡野 火事があるとひとりでに庭に出てくるんですね。そういうエピソードが『今昔物語』とかにあるんです。燃えそうになると木にひっかかってたり。

——火事のなかを源博雅が楽譜と楽器を取りにい、あれは本当の話ですか？

岡野 唐の時代に中国の雅楽が統一されて、則天武后が『楽書要録』という全十巻のものを書かせるんです。それを古備真備がもらって日本に持って帰ってくるんです。今は三巻くらいしか残ってないのですが、芝 私実は『楽書要録』を読んだことが

ないんですがね、演奏法や楽の由来などが書いてあるのだと思います。吉備真備はそれと一緒に銅律管という、チューニング・パイプみたいなものをもらって帰ってきたんです。

岡野 というわけで、源博雅が楽譜を取りにいった話は、世界中にある『英雄譚』にのつとった創作です（笑）。でも、やっぱり火事になったらまさきに楽器と楽譜のことを考えますよね。

芝 晴明自身は中国へ勉強しに行ったんですね。

岡野 いえ、はつきりとは。行ったという伝説はいくつかありますけど、本当に行つたかどうかはわかりません。向こうで伯道上人に教えを乞うたという、そんな伝説はありますけど。

——雨乞いのエピソードで、博雅が知らず知らずに使役を果たしていますが、あれは楽が神様に働きかける力を持っているという解釈なんですかね。

岡野 そうです。「通天」というのかな、上につながるというか。笛つて天と地を結ぶものですね。そうそう、その話も聞こ

うと思つて。やはり演奏者としての実感を、芝 そんなことを言われると困っちゃうな（笑）。確かに、私が吹いているのは「竜笛」といいますよね。それから笙は「鳳笙」。箏には尊称がないですが、笙というのには実際に響きを聴くと、色気がないというか、音がまっすぐなんです。遊ばないんです。ちょうど雲の間から光がまっすぐ降りてくる、ああいう感じなんです。武満徹さんが最初に雅楽を聴いたとき「音の束が天のほうに向かって立ち上がつていった」と表現していましたが、そんな感じの楽器です。反対に箏は非常に人間臭いというか、喜怒哀楽の表現ができる楽器です。プレイヤーが上手なら、本当にいろんな表現ができる。苦しい音、楽しい音……。動物的というか、動きのあるもの、地上の動きを表している。そして「竜笛」は字で書いた通り、竜ですから、地上と天を行き来する。笙と箏と笛で、その三者がちょうどミクロコスモスを作っているというふうなことが言われているんです。

岡野 先生が公の場で吹くときはホルンの中が多いですけど、ホールと野外って、何



か違いはありますか。

芝 そうですわねえ。もちろん場所によりま
すけど、野外は吹いていて気分がいいで
すねえ（笑）。自分の笛の聴き手にはまわ
らないものですから、残念ながらよくわか
りませんが。雅楽というのは、野外で演奏
していった歴史が長いですからね。四畳半
なところに入ってきたのは平安時代からで
すね。天皇が中心になって、みんなが楽器
を持ちよって演奏する「御遊」という形。
それまでは職業樂師が舞の伴奏をしたり樂
を演奏して、皇族は聴く側になつていたけ
れど、それを自分たちでやろうと言いだし
たわけですね。職業樂師に習つて、樂が上
流階級の楽しみになった。そのなかの一人
が源博雅ですよ。

雅楽は人間と自然を
調和させる

岡野 私、やっとこの間「教訓抄」(★5)を手に入れたんです。最初のほうしかまだ読んでないんですけど、面白いですわねえ。最初を読んだだけで涙が出てくるくらい。芝 この人は六十になっても、子どもがま

だ小さいんですよ。どうしても書き残さなきゃならないと思つて書いたものですね。岡野 泣く泣く書いてるんですよ。本当は書き残したくないのに、しかしこれは書かなきゃだめだ。でも書いてみると全部「秘すべし、秘すべし」だからすぐ燃しいよとか(笑)。もう伝えられる人がないようだったら、燃やして捨ててくれと。芝 話は遠いんですけど、二〇〇二年から学校で日本音楽を教えることを文部省が決めたんです。全国の中学校で、三味線、琴、尺八、雅楽、民俗楽器、なんでもいいのですが、必ずやると。だから、学校の先生は大変ですよ。

岡野へえ。

芝 どうやって雅楽の楽器を揃えるか、大変だと思えます。本物の楽器は高いですからね。箏は百万円くらいしますしね。まあ本物じゃなくてもいいのですが、かといってあまり安物でも困りますから。

岡野 困りますよねえ。でも、それで楽器を作る人もまた増えるかもしれないですよ。それに、雅楽を知ると、子どもたちがグラウンディングしますよね、絶対。

芝 そうですね。さつき、孔子の礼樂が非常にゆつくりした音楽だという話をしましたけど、私は今の子どもたちが速いリズムの音楽を聴きすぎていると思う。昨日さる若者がね、貧乏ゆすりを始めたんです。貧乏ゆすりというのはすごく速いテンポでしょ(笑)。ああ、この人は苛々しているんだなあ、というのが伝わってきました。速いテンポは苛々した気持ちを表しているし、そういう曲ばかりで子どもを育てると落ち着いた雰囲気にならないんじゃないかと。だから、雅樂のようなゆっくりしたリズムを与えたほうがいいんじゃないかな。お酒がいけないとか、タバコがいけないとか言いますが、リズムも同じで。

岡野 TVのポケモンで慌てちゃう子どもたちがいるのと同じですね(笑)。

芝　そのためにもね、雅楽を教えるのはいいんじゃないかと。

岡野 私が『陰陽師』を「メロディ」という少女漫画誌にもつていったのも実は似たような理由なんです。少女漫画読んでいるのは、来世紀母親になる人たちじゃないですか。来世紀の子どものことを考えて

あげなくてはと思って。読者である女性か
自信を持つてほしい、そうでないと子ども
が育てられないと思うんです。

芝 なるほど。音楽もそういう視点で流してくれるといいですね。テレビにしても

岡野 六〇年代くらいまでは、子供番組組ですごくよかったですよ。アニメーションにしても、ものの作り方が、ちゃんと作る人が何を作るのかわかっていて。最近はもっと受け取る側のことをまったく考えないで、作り手は自分のことしか考えてないんですよね。出版社も、作家もみんなそう。芝 刺激の強いものばかりを好むような傾向

向がありますよね。雅楽を演奏してみればわかりますが、基本は呼吸です。お腹でいっぱい吸って、ゆつくり時間をかけて吐く。岡野 気功なんか、吸うほうよりも吐くほうがゆつくり。全部吐ききると、吸おうとしても入ってこない感じがする。芝 そうです。それに音が重なっているから、精神衛生上いいのかもしれない。

岡野 神楽の歌にしても、歌う音程によって響く場所が違うんですよね、体のなかのだから内臓と一緒に振動しているんじゃない

いかな。雅楽は人間の体と自然との調和をとるもののような気がするんですね。

芝 そうでしょうね。そうでなかったら、続かなかったと思う。そのあたりに雅楽が長続ながつづきした理由わけがあると思いますね。

岡野 それにしても、よく残りましたね。芝 今まで雅楽は天子様の音楽という感じがあつたんですが、最近はどうではなくなつてきた。興味をもつてくれる人も多くなつてきて、どこで演奏しても満員ですよ。そんなことは今までになかった。でもね、最終的に、雅楽は聴くものではなくて、やるものです。

岡野 やつてみないとよさはわからないですよね。
芝 それが結論じゃないですかね(笑)。
岡野 できたら室内じゃなくて、野外で
(笑)。(構成・脇坂敦史)

(構成・監坂敦史)

オクターヴと完全四度(三対四)を太々に重ねて一つの計算を何度繰り返して同じ音名には達せず、微少な差が生じる。古代ギリシヤでもビタゴラスが同様の計算で音律を作り、この微少な差はビタゴラス・コンマと呼ばれている。つまり、B $\sharp$ とCが異名同音に呼ばず、音律が閉じた円環ではなく無限の螺旋を形成することになる。ちなみに十二平均律は一オクターヴを十二個の半音(二の十二乗根)に等分したもので、オクターヴ以外はずべて純粋音程から少しずつずれていくから、十二平均律における五度はここである完全五度とは微少にずれる。

★2 ドレミ、ソラに当たる。さらに徴と宮の半音下の変徴(フ $\sharp$)と変宮(シ)を加えたものを七^レとして、

★3 豊原統秋による音楽書(五二二年成立)

★4 陰陽師が邪気を払うために呪を唱え、地

を踏みしめ、千鳥足に歩む呪法で、悪い方角を踏み破るといふ意味があつた。神楽や猿楽など芸能のなかにも取り入れられている。

★5 狛近真による音楽書(一二三三年以前に成立)。『体源抄』(★3)、『楽家録』(安倍季尚編一六九〇年成立)とともに三大楽書と呼ばれる。

★ ★ 音律やピタゴラス音階、五芒星、黄金比については、『ドナルドの算数マジック』(一九九九年、デイズニービデオ)がわかりやすく解説して参考になる。



九鳥々!

10・2000 No.198 500yen

2000年10月1日発行(毎月1日発行)第18巻第10号 平成6年1月25日第三刷発行

特集 岡野玲子 「陰陽師」世界に遊ぶ

すべてを語り尽くす3連続対談
岡野玲子＋荒俣宏／＋鏡リュウジ＋芝祐靖
小松和彦の本格解説／著者による「陰陽師」入門ガイドブック
事件の痕跡をたどる「平安京事件マップ」
幻のデビュー作品から今まで「完全作品リスト」
エッセイ 池上永一／恒松正敏／宮田まゆみ／夢枕獏
など、盛りだくさんで内容充実!

漫画「千のみだらな夜 光り輝く王国」

九鳥々!

10・2000 No.198 contents

reiko okano

特集 岡野玲子

「陰陽師」世界に遊ぶ



特集

16 岡野玲子の旅
夢枕瑠
text by zaku yunemakura
18 魔都平安京に
陰陽道のルーツを
見ること
岡野玲子・荒俣宏
Nobuo Arakawa and
Reiko Okano

24 西洋東洋、
占星術比への儀
岡野玲子・鏡リュウジ
text by reiko okano and ryuji negami
31 安倍晴明と素との
関わりを探ること
岡野玲子・芝祐靖
text by reiko okano and yuhsaku shiba
40 小松和彦による格闘技
陰陽師とは誰か
lecture by kazuhiko komatsu

46 岡野玲子と
仙境に遊ぶ
鬼と戯れる人／恒松正敏
テクニクを捨てて／池永一
音楽を通して世界を感じる
宮田まゆみ
52 完全作品リスト
事件の現場を辿る
平安京マニア

45 岡野玲子による
陰陽師入門ガイドブック
巻末 特別掲載
202 彼岸先生の恋
島田雅彦
203 千のみだらな夜
光り輝く王国
原作・島田雅彦
作画・岡野玲子

新連載

102 バンク侍 斬られて候
町田康

72 特別掲載

涙の贈り物
肌の贈り物
レベッカブラウン
柴田元幸

56 書評・時評

56 新世紀小説時評
三浦しづ子・川上未亜子・磯田史郎

64 面白本が

「ミルガリアンダ」
「ウニラ」
「先山あかり」
町田康さんへ／前木敏

68 著者が語る「私の本」
読者が書く「私が読んだ本」
伊藤明彦・佐藤大輔

70 ブックス・

クロスレビュー
今月のテーマ「人生の裏面」
聖田明弘・松尾スズキ・永江朗
ゲスト：河井実

連載

64 東京タワ
江國香織

94 プス論

大塚ひかり
シユガー・コート
唯川恵

116 タロツツの図像学
鏡リュウジ

124 蛸婦
若合春佑

132 だいじょうぶ?
平岡至・大友

きつと・大友

あしたはうんと
遠くへ

152 宗教が住く
文入優・斎藤緑南

162 嵐山光三郎

169 必ずお読み下さい
一條裕子

176 戊辰の残歌
工藤美代子

183 非道行ずべからず
松井今朝子

コラム

となりの芝居 木俣冬

101 揺れる揺れるドラマは揺れる
小泉すみれ

141 うしろからコミック 阿部幸弘

175 敬愛イックノイト 木村立哉
愛してシネマ 石原都子

郷子・清水達夫
アートディレクション・木村祐治
デザイン・横山孝子(木村デザイン事務所)
イラストレーション・長崎園子
1/3広告イラストレーション・しりあがり海
表紙絵・岡野玲子・夢枕瑠(陰陽師)自費出版
本誌の情報はマガジンのハウスのホームページ
「マガネットカフェ」
(http://www.magazine.co.jp/)
でも紹介しています。
二重見・二重聞を致せ下さい。
huto@magazine.co.jp
©株式会社マガジンハウス2000 第198号 別冊私蔵
印刷所／凸版印刷株式会社